

(2022年11月15日)

第40回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： 2022. 10. 8 (土) 14:00～16:40

場所： 文京シビックセンター 4階B会議室

出席者：16名

< 配布資料 >

資料-1 赤松小三郎と赤松大三郎について(レジメ)～石川浩さん

資料-2 (別紙1) 小林利通氏の資料、系図、他資料

資料-3 赤松小三郎 建白書の「謎」(まとめ)(レジメ)～石川浩さん

資料-4 (別紙2) 慶応丁卯雑記の幕府宛建白書と島津久光宛の建白書を比較～石川浩さん

資料-5 赤松小三郎と山本覚馬(レジメ)～滝澤進さん

< 内容 >

I 赤松小三郎と赤松大三郎について

発表者：石川浩氏

1. はじめに

第39回の研究会で、参加者から二人の先祖について質問があったので、調査した結果を報告する。

なお、この報告内容は証拠不十分な点もあり、推測の部分が多々あることをご了承願いたい。

2. 「赤松小三郎」

養子先の赤松家：(現在の兵庫県三木市) 三木城主別所長治に仕えた別所刑部大輔頼清の末裔。明石・岡で**広瀬**と名乗る。天保4年(1833)赤松(弘)と改姓。

「赤松大三郎」

播磨国(現在の兵庫県姫路市)の出身で、赤松義則しよりゅうの庶流びょうえい(庶子の系統)の苗裔(末の血筋)。

父、吉沢雄之助の二男で、祖父、赤松良則の養子になる。祖父は、龍野藩(現在の兵庫

県たつの市)御用達の干鰯いわし問屋を営み、苗字帯刀を許された。後の名を「赤松則良」。

幕末～明治にかけて活躍し(海軍中尉)、日本の造船の父として男爵に叙され、貴族院議員を務めた。

- 結論：お互いの系図や小林利通氏の資料ほかを検討したが、赤松家本流の子孫ではない。また、お互いの関係はない。

II 赤松小三郎 建白書の「謎」(まとめ)

－「慶応^{ていぼうぎつき}丁卯雑記」に写された、幕府宛建白書を総括する－

発表者：石川浩氏

<参考～前回 39 回研究会での発表のレジメの最後の箇所>

「謎」のまとめ (私見として)

- ・幕府宛の写しは、なぜ春嶽宛及び久光宛と比べて違うのか？
- ・小三郎があえてその内容を変更したのか、もし変更したとすればなぜか？
- ・盛岡藩士が写し間違えた可能性もあるが、幕府宛原本と照合ができないので確認できない。
- ・幕府宛の原本は、どこにあるのか？
- ・小三郎が建白書(「建白七策」)を書くに当たって参考にした資料は何か～西洋事情・英国史・大英国史？

1. はじめに

前回 39 回研究会で多くの疑問が残ったため、今回は盛岡藩の「慶応丁卯雑記」に写した人物と原本について再検証し、総括をする。

2. 「赤松小太郎」は存在するのか

「赤松小太郎」は、盛岡藩の京藩邸で「慶応丁卯雑記」を担当した人間で、盛岡藩士と推定する。小三郎本人が書いたのなら、必ず「松平伊賀之守内」とするはずが、「赤松小太郎」のみである。自分の部署を明らかにしていないことから、某資料館の担当者の見解と同様に「赤松小太郎」と単に誤写したとは片付けられない。

3. 小三郎の幕府宛の建白書の原本は何処にあるのか

結論は、不明のまま。また、どうやら徳川慶喜の手元にも届いていない。

専門家の意見では、小三郎は幕府宛の建白書を永井尚志や原市之進(徳川慶喜の懐刀)に提出したと言われている。二人は入手した建白書を慶喜の側近に見せたはず。

しかし、徳川慶喜公伝(渋沢栄一著)には、福井藩主宛に提出した小三郎の建白書の記述はあるが、幕府宛のそれについては触れていない。徳川慶喜公や渋沢栄一の記念館に問い合わせしたが、遺留品の中に小三郎の建白書は見つからない、との回答であった。

4. 嵯峨根良吉の「時勢改正」について

薩摩藩京藩邸から小三郎の建白書を島津久光に届けるように依頼された良吉は、その内容を見たようだ。彼の「時勢改正」は小三郎の建白書を箇条書きにしており、内容に大きな違いはなく、数字などの間違いも見当たらない。各項目の最後には「趣意なり」という表現があり、何かを写したことがわかる。

もう一つ特徴は、幕府寄りの表現が見当たらないこと。その後良吉は、薩摩藩の教授方に採用され、32歳で病死している。

5. まとめ（総括）

小三郎が慶応3年5月に永井尚志らに届けたであろう幕府宛の建白書を、盛岡藩士が見てその内容を別の内容に書き上げ、それを「赤松小太郎」なる人物の建白書として「慶応丁卯雜記」に写した。盛岡藩には四侯会議の半年後の同年11月に持ち帰り、周知したようだ。

①なぜ「赤松小太郎」は自分の部署を明らかにしなかったのか、また、②なぜ建白書の内容を変更したのか、についての疑問が残る。これらの解明には小三郎が幕府宛に提出した建白書の存在を明らかにすることが先決。それまでは推測の領域である。

III 赤松小三郎と山本覚馬

発表者：滝澤進氏

1 はじめに

赤松小三郎（上田藩士、天保2年（1831）生）と山本覚馬（会津藩士、文政11年（1828）生）は、ほぼ同世代（赤松小三郎が3歳年下）で、ともに、幕末の激動期等において、日本の近代化のために歴史的な業績を残したが、その業績が通史において十分な評価が与えられているとは言い難い現状にある。

両者は、勝海舟の門人であり、佐久間象山からも、弟子として（覚馬）、また、友人として（小三郎）、多くのことを学ぶとともに、江戸、長崎、京都における外国人を含む多様な人々との交流等を通じて西洋文化等を吸収し、旧来の思考を脱した、新しい時代に向けての国のあり方を構想した。

その基本的な思想は、公武一和による、平和的な手段・方法を通じての、他国にひけを取らない近代国家を建設することであったが、両者は、このような構想を、それぞれ、建言（小三郎「建白七策」（1867年（慶応3）5月）、覚馬「管見」（1868年（明治元）6月）としてまとめ、その実現を目指した。

これらの建言は、日本の近代化のためのグランドデザインを描いたものとして高く評価され、幕末から明治初期にかけての現実の政治にも、大きな影響を与えた。

小三郎の「建白七策」と覚馬の「管見」には、重なる部分が多く、また、慶応3年には、

両者は、連携して、幕薩一和のため、幕府、薩摩双方の要路への積極的な働きかけを行ったが、これらの基礎には、両者の京都における親しい交流等があったものと考えられる。

2 赤松小三郎と山本覚馬

(1) 両者の接点

- ・具体的な接点として明確に確認されているのは、覚馬が、薩摩藩の獄中で口述筆記した「時勢之儀ニ付拙見申上候書付」（1868年（明治元）3月）においてである。
この「時勢之儀ニ付拙見申上候書付」において、覚馬は、小三郎を介して、薩摩と幕府・会津藩とのわだかまりを解くため、仲介を行ったと述べている。
- ・両者は、ともに、勝海舟の弟子であり、佐久間象山の弟子または友人であって、旧来の保守的な考え方を否定し、西洋の進んだ技術の吸収に熱心であった。
- ・また、小三郎は、京都で、会津藩からの要請により、薩摩藩士に対して指導を行っていたと同時期に、会津藩士に対する指導も行っていた。
- ・これらのことから、両者は、京都や江戸で、かなりの交流があったものとみられ、これらの交流が、幕薩一和のための連携した政治活動に結びついたものとみられる。

(2) 山本覚馬について

- ・山本覚馬は、1836年（文政元）会津藩士山本権八（会津藩砲術指南役、10人扶持）の嫡男として生まれ、江戸で**佐久間象山**、**勝海舟**らに学んだあと、藩校日新館蘭学所の教授などとして、会津藩の軍制の近代化を推進した。
- ・1864年（元治元）、京都守護職に就任した藩主松平容保にしたがって上洛し、禁門の変では、会津砲兵隊を率いて長州軍と戦った。
- ・1867年（慶応3）、幕府、会津藩と薩摩藩との対立が厳しくなる中、赤松小三郎と連携して、紛争の平和的解決を目指して幕薩間を周旋したが、実らなかった。
- ・鳥羽伏見の戦いでは、眼病のため京都にとどまっていたが、大坂に移動する途中で薩摩軍に捕らえられ、以後1年余り、同藩の獄中に幽閉された。
- ・覚馬が獄中であって口述筆記した「管見」は、日本近代化のグランドデザインを描いたものとして、新政府側にも高く評価された。
- ・釈放後は、京都府顧問として、「管見」の考え方を基に、京都の産業振興や人材育成など、京都の復興、近代化に大きく貢献するとともに、京都府顧問退任後も、京都府議会議長、京都商工会議所会頭に就任するなどして、活躍した。また、新島襄に協力して、同志社の創立に尽力するとともに、自身も受洗した。

(3) 山本覚馬の思想（提言・意見）

- ・保守的な色彩の強い会津藩で育った覚馬だが、江戸で象山、海舟等に学び、また、京都で幕臣や赤松小三郎等諸国の藩士と交わり、さらには長崎で西洋人と交際したことなどにより、古いしきたりから脱却し、西洋諸国に負けない近代国家を作る必要性を強く認識し、このための提言や活動等を積極的に行った。

- ・1863年(文久3)には、会津藩主に対し、海防策を提言するとともに、王政復古後、薩摩藩の獄中において、口述筆記により、近代国家建設に向けてのグランドデザインである「管見」を著わし、薩摩藩に提出した。
- ・釈放後は、京都府の顧問に招かれ、「管見」の考え方を基に、京都における人材育成、産業振興を推進し、京都の近代化に大きく貢献した。また、新島襄に協力して、同志社の創設に尽力した。

● 「守四門両戸の策」(1863年(文久3)11月20日)

覚馬の1つ目の建言で、海防の重要性を訴えている。

海防の重要性については、覚馬の師である象山や海舟がすでに唱えており、覚馬の海防論は、この2人の海防論を継承したものと言えるが、兵庫の開港が問題となっていたことから、瀬戸内海の**四門(摂津、播磨、山陽、四国)の防衛**の強化を強調している点に特色がある。

● 「時勢之儀ニ付拙見申上候書付」(薩摩藩あて)(1868年(明治元)3月)

覚馬が、薩摩藩の獄中で、口述筆記により著わした最初の意見書であり、旧幕府や会津藩が誤っていたとする一方、幕府や会津藩、桑名藩には他意は無いので、「万国公法」のような公明正大な扱いをするよう求めている。

また、この意見書の中で、覚馬は、1867年(慶応3年)6月に、幕府、会津藩と薩摩藩との間の誤解を解くため、小三郎と連携して、仲介に当たったが、薩摩藩は提案を受け入れたものの、幕府の監察(大目付永井尚志)が受け入れなかったため、不調に終わった旨を述べている。

● 「管見」(薩摩藩あて)(1868年(明治元)6月)

覚馬が、獄中で口述筆記した2番目の建言書で、覚馬が書いたものの中で最も重要なものであり、新政府関係者からも、日本近代化のためのグランドデザインを描いたものと高く評価された。

覚馬は、「管見」において、まず、安定した政治体制の構築を訴え、政治、経済、教育等の幅広い分野にわたり、重要な提言を行っているが、その基本となる考え方は、今後日本が取るべき道は、明治新政府が、確固たる国是を立て、富国強兵を実現し、外国が付け入る隙をみせないようにすること、であった。

その提言は、明治政府による近代化政策の先取りのような内容を含んでおり、富国論に基づき商業や貿易による国富を唱えるものであった。

やがて覚馬は釈放されて京都府に出仕するが、出仕のきっかけとなったのが、覚馬が獄舎の中で構想した「管見」だったのである。

(4) 「建白七策」と「管見」

- ・「建白七策」と「管見」は、新しい日本の進むべき方向を示すものとして、基本となる考え方は共通しており、具体的な提言内容も重なっている点が多い。
- ・これは、両者が京都で日本の将来像についての構想をまとめるに当たって行った意見交換や情報交換等の成果が、二人の提言内容に反映されていることによるものと考えられ

る。

- ・他方、覚馬の提言には、時代の変化を踏まえ、商社や保険制度、女子教育など、覚馬独自の提言も多い。
- ・覚馬の「管見」の23項目中、建白七策に対応する何らかの記述がある項目は10項目(①政権、②議事院、③学校、④変制、⑤撰吏、⑥国体、⑦建国術、⑨貨幣、⑩衣食、⑮軍艦国律)であり、他の項目は管見のみに記述がある。
- ・政治のあり方については、小三郎が、議会決議の優先や被選挙権などについて極めて進歩的な提案をしているのに対し、覚馬は、王政復古が行われた事実を前提として、小議院の被選挙権を当面公家や藩士に限るなどの現実的な提案を行っている。
- ・また、人材教育については、両者ともに力点を置いているが、覚馬は、特に女子教育に重点を置いている点に特色がある。
- ・貨幣については、小三郎が、「貨幣の全国統一」を主張し、覚馬は、紙幣の発行には金準備金が必要だとしている。
- ・軍隊については、小三郎は、陸軍の兵数を示すなど、時代のニーズを踏まえた具体的な提言をしている点に特色がある。

(5) 小三郎と覚馬。慶応3年の幕薩一和に向けての連携

- ・上記のとおり、小三郎と覚馬は、慶応3年、京都において、幕府と薩摩藩との武力対立を回避するための仲介を行った。
- ・この両者の仲介努力が直接的に報いられることはなかったが、2つの史料〔①小三郎「慶応3年8月17日付兄あて書簡」、②山本覚馬「時勢の書付(明治元年(1868年3月))」を見ると、ほぼ同時期に、連携して、幕府と薩摩藩との紛争の解決のため、それぞれの要路に積極的な働きかけを行っていた様子が伺える。
- ・具体的な仲介内容は、この2つの史料からは、明らかではないが、小三郎は、建白七策の考え方をベースとした新しい日本の姿を示しつつ、幕薩一和を訴えたものと考えられる。
- ・また、仲介の途中段階では、小三郎は、「少しは見込みがありそうだ」とし、覚馬も、「薩摩藩は同意したが、幕府側が提案を受け入れなかった」として、両者とも、途中段階では、ある程度の手ごたえを感じていた模様である。ただ、この時期、薩摩藩は、武力動員によって政体一新を図るとの方針に転換しつつあり、小三郎や覚馬の仲介によって、平和的な解決を図る余地があったかどうかは、微妙である。
- ・なお、薩摩藩と土佐藩は、慶応3年6月、薩土盟約によって、新しい政体への平和的な移行についていったん合意しており、小三郎と覚馬の幕薩一和に向けての行動が、薩土盟約の締結に大きく影響した可能性がある(薩土盟約の基となった後藤象二郎の提案の内容は、赤松小三郎の構想と大同小異だった。)(三谷博「維新史再考」p264)

(6) 山本覚馬との比較における赤松小三郎

- ・小三郎と覚馬は、ほぼ同世代の武士であり、ともに、日本の近代化に向けて、渾身の力

をふるい、大きな業績を残した。

- ・両者は、ともに、わが国の政治、社会等の近代化のためのグランドデザインを描くとともに、慶応3年には、幕薩一和のために、連携した政治活動を行った。
- ・小三郎は、若くして命を奪われたが、「建白七策」に示されたその思想は、薩土盟約の基となった後藤象二郎の提案に大きな影響を与えるとともに、覚馬の「管見」やそれをベースとした京都における様々な活動等を通じ、日本の社会、産業、教育等の近代化に大きな役割を果たした。

<事務局からのお知らせ>

○「第9回赤松小三郎講演会」

日時：2022年12月10日（土）、14：00～16：30

場所：日比谷図書文化館（地下1階）コンベンションホール（昨年と同じ）

講師：三谷博氏（東京大学名誉教授）

演題：「赤松小三郎の立ち位置 ―公論と暴力の比較史を背景に―」

※現在（10月8日）の参加申込みは50名を超えたところです。最低100名を目標にしていますので、皆様の声かけをよろしくお願いいたします。

（記録：荻原貴）